

究極の物語商品は人工知能が作る!

橋爪 大三郎 東京工業大学助教授

「物語商品」の条件は2つある。1つは「どこで誰が作ったかが、はっきりしている」こと。もう1つは「その商品にまつわるストーリーを自分だけ、もしくは限られた人だけが知っている」とことだ。

「作り手の顕在」が物語商品の条件

機械による大量生産方式の普及で、初めの条件が崩れた。電球をみて、「エジソンは偉かった」と思うことはあっても、個々の電球は誰が作ったか全くわからない時代になったということだ。結局、大量生産社会では、商品全般が物語性を失い、商品に代わって「芸術」がその役目を引き受けることになる。

ただ、このように商品やサービスが物語性を失ったのは、日本では最近の話だ。衣食住のうち、「住」はともかく、衣、食が大量生産品によって満ち足りたのは高度成長期以降であるし、サービス面でも、一定レベル以上のホテルに国民の大多数が泊まれるようになったのはここ10年くらいのことだ。こうした「商品、サービスの飽和」の時代の到来が、物語商品へのニーズの高まりを招いたのだが、最近の「金余り」がこれを加速した。ただ周知のように、実は金余りではなく、地価の高騰で住宅が買えず、余力が商品やサービスに回ったにすぎない。

作り手の側も物語商品の開発、供給に力を注いだ。日本は中小企業や地場産業など大量生産システムに乗り切れない生産者が多い。こうした企業は販売力や生産性では当然、大企業に太刀打ちできないが、逆に値段は高くても手の込んだものを作れる、生産数量は限られているが、それが希少価値を生む、という具合に消費者の要求に合致してくる。これはつまり、大量生産のラインに乗れなかった「すき間」にポトリと落ちたテキサスヒットのようなものだ。大企業の方も、社名を隠し



橋爪 大三郎 (はしづめ・だいさぶろう) 氏

東京工業大学助教授。72年、東京大学文学部卒。77年、同大学大学院社会学研究科博士課程修了。89年3月から現職。構造主義など社会理論に幅広く精通、最も注目を集めている若手社会学者の1人。著書に「言語ゲームと社会理論」(85年、勁草書房)、「仏教の言説戦略」(86年、同)、「はじめての構造主義」(88年、講談社)などがある。40歳。

たり、第2ブランドを作るなどして対応してきた。また日産自動車の「Be-1」のように限定生産を売り物にしたり、細部を少し変えて特徴を出すなどという手法で消費者の購買意欲を誘っている。

さて、物語商品のもう1つの要件である「情報の専有」だが、これは現代社会の「情報の氾濫」に源がある。本来、情報や知識は共有されるのがルールだが、情報量が膨大になり、専門化したので共有しきれず、かえって知らないことが増えた。しかし、我々には知らないことに対する「おびえ」がある。逆にいえば、自分しか知らないことがあると安心する。そして、他人に対して、それについてうんちくを傾けなくなる。本来、知識、情報の専有には「権力」が発生するのだが、物語商品にまつわるストーリーなどは専有しても社会的に害にならない。したがって誰もこれを批判する筋合いのものではない。

本物の物語商品は貴族が作らせる

ところで、最近、庶民の間にも「貴族の生活」や「貴族趣味」についての関心が高まってきた。

貴族というのは職人に思い通りの製品を作らせ、料理人にうまい料理を作らせる「完全な消費者」である。つまり、貴族は製品の「物語」を享受するが、生産の作業そのものから超然としていられる。そこに、生産、流通システムに組み込まれ、がんじがらめにされた現代の消費者があこがれるのだ。ただ国によって事情が違っても確かだ。

欧米ではどうか。まず米国だが、ここは早い時期に工業製品が飽和に達したが、そもそも貴族というものが歴史上、存在したことがないので、貴族へのあこがれが薄い。生産面でも貴族的商品を作れる伝統的地場産業や中小企業が少ない。ヨーロッパの場合は逆に本物の貴族がまだ残っていて、庶民が貴族のまねごとをしても「滑稽以外の何ものでもない」というのが常識である。

日本はどうか。そもそも日本には貴族はいなかった。貴族的な性格を持つ階層はあったが、これらは本来、官僚や武士であった。明治以降の華族

も同様だ。ただ、このあいまいさが、かえって庶民に貴族へのあこがれを持たせるのである。

しかし、本当の貴族は庶民にとって陰惨なものであることはヨーロッパの歴史をみれば明らかである。貴族は家系で決まるものなので、日本人一般が、なりたいたいと思ってもなれるものではないが。

日本では「貴族商品」は無理。しかし...

それでは、将来、日本の庶民が、かつてのヨーロッパの貴族のように自分だけの商品、サービスを手に入れる可能性が全くないのか。答えは「ノー」である。今後の技術の進歩で、それができる可能性が出てくる。人工知能によって、消費者が自分の思い通りに機械に「一品生産」させることができるはずだ。生産技術がこのようなレベルに達すれば、ロボットなど生産ラインがあたかも使用人のように働き、庶民はかつてのヨーロッパの貴族のようにふるまうことができるのである。(談)

出版ニュース

'90. 1/上・中

— 29 —

● アンケート ●

● 今年の執筆予定 ●

暮れから持ちこしの、「性愛のポリテイクス」という中篇論文をまず書く予定。あと、連載や依頼を順にこなす。あとも、連載や依頼を順にこなす。あとも、連載や依頼を順にこなす。

橋爪 大三郎 (社会学)

星です。

大成建設

大 成 建 設